

「魅力センサー」

森素緑

私は仕事の関係でセンサーの開発に取り組んでおります。

センサーとは、感知器の意味で、人間の感覚器官に相当するもので、人間が本来もちあわせている七感（温覚・圧覚・臭覚・味覚・触覚・視覚・聴覚）を電氣的、光学的、物理的、化学的または磁氣的に各々、用途に応じ創意工夫して製品化された電子装置である。

人間の頭脳はコンピュータに相当し、目はレンズ、皮膚は圧力、温度、感覚センサーに相当する。特に光ファイバーセンサーは目と視神経の働きをする。センサーはオートメーション、ロボット、工作機械等の省力化機械には欠かせないので、このシステムの手、足、目、耳となっている。センサーは汎用のものが多いが、それぞれ個々の目的、用途に応じたオーダーメイドが最も優れた効力を発揮する。そこで多品種少量生産が多く、種類も千差万別である。また、開発するのに電気、磁気、光学、メカトロニクス、コンピュータ等の総合技術を要するので、幅の広いセンスのある開発技術者が求められる。センサーとして使われる磁石は、強ければ強いほど、砂鉄や道ばたの鉄クギをひきつけてしまう。これは、磁石と砂鉄間には目にみえない磁力線が働いているからである。

磁石は鉄をひきつけるが、人間をひきつけるものを魅力という。魅力のある人は、体全体または頭脳の中に磁石のような魅力石があるのではなからうか。この魅力石は人の努力、経験により培われるか、生まれながらもちあわせているもので、人それぞれにより異なり、魅力を感じる側（アクセプター）との間に、磁石でいえばフレミングの法則のような相関関係式があるのではないだろうか。また、磁石と同じように、人によっては魅力を感じない、反発する場合もある。

生き物の魅力のうち、顔や形といった表面的なものの魅力には寿命があり、内面的な魅力は逆に寿命が長く、益々魅力が増大するものである。また絵画や音楽等の芸術には永遠の魅力があろう。

この魅力というものは、つかみどころがないもので、時には馬鹿なことをする人とか、ある時には生真面目な人とか、同じ人、同じ行為、同じ場所でも、変な時に変な人に魅力を感じるものである。即ち、魅力をもっている人とアクセプター側とが調和する心の共鳴現象体である。

誤解は心の共鳴センサーの鈍い人に起こり、誤解を解くには双方のコミュニケーションが最も重要である。口で話し、耳で聴き、態度で表すコミュニケーション会話が一般的であるが、東洋思想では、目で話す、暗黙の了解、アウンの呼吸といったコミュニケーション、即ち双方向光通信らしきものもある。

我々の社会の中で生きていく為にはお互いのコミュニケーションが最も重要である。このコミュニケーションによって信頼関係が結ばれる。

我々だれしもが魅力ある人になりたいと思っている。魅力のある人には人が集まり、ひきつけられるものである。